

シリーズへ詩線をつなげて〈第1回

2021年4月

高麗郷住民 上野文康

I 詩を読む

もっと強く

茨木のり子

もっと強く願っていいのだ
わたしたちは明石の鯛がたべたいと

もっと強く願っていいのだ
わたしたちは幾種類のジャムが
いつも食卓にあるようにと

もっと強く願っていいのだ
わたしたちは朝日の射すあかるい台所が
ほしいと

すりきれた靴はあっさりと捨て
キョツと鳴る新しい靴の感触を
もっとしばしば味わいたいと

秋 旅に出たひとがあれば
ウイंकで送ってやればいいのだ

なぜだろう
萎縮することが生活なのだ
おもしろい村と町
家々のひさしは上目づかいのまぶた

おーい 小さな時計屋さん
猫背をのぼし あなたは叫んでいいのだ
今年もついに土用の鰻と会わなかったと

おーい 小さな釣り道具屋さん
あなたは叫んでいいのだ
俺はまだ伊勢の海もみていないと

女がほしければ奪うのもいいのだ
男がほしければ奪うのもいいのだ

ああ わたしたちが
もっともっと貪婪にならないかぎり
なにごともしないのだ

II 二〇二一年文学的考察（四月）

Mからの手紙

昨夏、日月堂に、かつて僕が担任をしていた高校クラスの元女生徒（M）が訪ねて来てくれた。彼女は活発で、自由奔放で、何よりも知的好奇心あふれる女の子であったのだが、今は京都に住み、大阪の博物館なんかで「骨の学校」というようなワークショップを開いたりする。その彼女から、しばらくして手紙がやって来た。そこには、日月堂から京都の家に戻りついて、茨木のり子の「もつと強く」を十回ほど読んだと書かれてあった。爽やかな西からの風の到来。とても、うれしかった。詩を読むということがこんなにも生命力をもって立ち現われてくる場面に会って、何だかわからないが、その余波が自分にも及んでくるのを感じていた。十回ほど、「もつと強く」を読んだと書かれている手前のところに彼女はこんなふうに書いていた。

お店に行った時、棚に石垣さんと新川和江の詩集がならんでいたでしょう。この、ウィルスを前にして、みんながイライラしたりきゆうくつきを感じている社会にあって、私はちゃんと心を健やかに保って、ほしいものはほしい、やりたくないことはしないと言葉と態度で示しながら生きていくぞー、と心に誓ったのでした。

詩線をつなぐ

夏にこんなことがあり、秋から冬へ時間は移り、ぼくの中に「詩線をつなぐ」というイメージが生まれてきていた。

ぼくは、この手紙を読んだ時、自分自身がこのように茨木のり子の詩線をつなげて生きることを望んできたのだと気づいた。〈詩を読む〉という行為がそもそもそういうことなのだが、Mがそのことをあまりにも鮮やかに垣間見せてくれたので、はつきりさせることができたのだ。「詩線をつなぐ」というのは、詩の言葉を受感し、その言葉の力を生きる力に転化するということだ。そのことが詩に関わっての第一義的活動である。それでよい。それでよいのだが、「もつと強く」を読んでいると、戦後詩が身を置いていた社会的情况と現在の僕たちが身を置いている社会情況の違いを強く意識することも事実なのだ。そのとき、茨木のり子の詩的イメージとことばそのものを現在の情況のなかに創造的に転化させることができるなら、それはどんな詩になるのだろう、という考えが生まれるのは自然なことではないか。この時、ことばや形式を踏襲する程度が強ければ、いわゆる「本歌取り」の形式をとることになり、元の詩のことばや形式からの飛躍と独立的展開が強まれば、それは詩的創造一般のありかたになるだろう。いずれにしても、これを「詩線をつなげて」のさらなる活動と考えることができる。

準備していく

ぼくたちは今、新しい情況に向けて準備していく時代を生きはじめている。新しい情況というのは、地球温暖化（気候変動）問題に象徴される人間の在りよう全般のトランジション（移行・転換）ということなのだが、そのためには、これまでの経験、知識、感性、ことば、の再生と更新にかかわる多くの試みが必要だろう。たとえば、この事態

を語るのに、「人新世」という新語を使うことが始まっている。地球の歴史という枠組みを人間の歴史に食い込ませたこの使用法はぼくたちに新しい認識を迫る力を持っているのではないだろうか。

まことに、ささやかではあるが、そのような探求のひとつとして、このシリーズを始めようと思う。それで先の話にもどると、ぼくは、「本歌取り」とか、独立的展開とか、ということばを出したが、ぼくには詩の実作の経験はほとんどない。それでも、細い小径を歩くように、詩を読み続けてきた人間として、今こそ、詩の言葉の力を自分にしっかりと引き寄せたいという思いが湧いてくるのを感じている。

そんなわけで、このシリーズは次の三つの部分から構成される。

I 詩を読む〈今月の先行詩〉・・・戦後詩、現代詩、世界の詩などから、今の私たちにとって魅力的な作品を紹介する試み。

II 二〇二一年文学的考察・・・Iを鏡にして現在を考察する試み。

III 詩線をつなげて・・・I、IIを踏み台にして、新しい詩を生み出す試み。

III (新しい詩の試み)

序 こころの地面のためのことば

へ絶望の虚妄なることは

希望の虚妄なることと 相同じい

私のかたわらに 半世紀近くあった

このことばが 今 自分の中心に やってきていた

へ絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい

魯迅「希望」『魯迅選集第一巻』竹内好訳(岩波書店) 一九五六年

少しことばを足して憶えていた

魯迅も竹内好も

このことばとともに歩んだ

辛亥革命の前も後も 荒野であった

十五年戦争 その戦中も戦後も 荒野であった

私は 荒野に立っている と思ったことなどなかった

実に 半世紀も 脇にあるだけだった

このことばが 今は 真ん中にあり

進め というのであった

二〇二〇年 コロナ禍 世界を席卷
並行するように

気候変動危機の 世界の波
この国に至る

わが身边に
子供たちのための緊急アクション
トランジションタウンへの提起

わたしもこの状況の中にあり
わたしたちがこの状況の一端を担う
ささやかでもいい
一人一人が それぞれに

届け このことば
仲間の ころの地面に

〈絶望は虚妄だ、希望がそうであるように!〉

『魯迅文集2』竹内好訳(ちくま文庫)一九九一年

もつと強く 再びの

1

へもつと強く願っていいのだ
私たちは明石の鯛がたべたいと〈

へもつと強く願っていいのだ
わたしたちは朝日の射す明るい台所がほしいと〈

茨木さん
あなたのことばを リフレインすることは
今も 私たちの喜びである

しかし
私たちの日々の現実が
この喜びに影を投げかける

あなたが 鮮やかなことばで掲げたものは
均一化した色調で 過剰に 実現されて 今
私たちの手にあるから

あなたの時代の願いが
生産と消費の増殖する幾サイクルを経て
辿り着いた この国と この星の 危機の現状
それを 誰が想像しえただろう

わたしたちは途方に暮れている

私は けんめいに 記憶を手繰り寄せようとする

こんなことを考えたことも 幾度かはあったように思うが・・・

それにしても

政府とニュースは数字ばかりを伝える

わたしたちは そんなふうには進めない

壁

どこに？

自分の中？

それとも？

2

(ひと時の影に盲ず)

(あんた ひとりで考えとろうが)

(あんひとにや かもめや 魚や 生きものの

ついとらるるばい)

ようやくこんな声がやってきていた

そうか

一人称単数の檻の中

一人称単数現在の檻の中

で考えてしまう習性

そう気づいたとき

ここに 少し自在感が生まれてきていた

(どこからか 声が聞こえて来ていた

闇のむこうから

地の底から 海のむこうから)

そうだよ

へもつと強く願っていいのだ

戦後女詩人の願いは

そのまま わたしたちの願いでもある

いまのわたしたちの願いは

それと同じものだ

同じものだが ちがうものだ

だから わたしたちは それを更新する

思い起こそう
ありきたりのあきらめと絶望との戦いの中に
あなたの リフレーションは生まれた
わたしたちはそれを引き継ぐ

あなたの 強い願いのリフレーションは
わたしたちの お仕着せの快適にまみれた
惰性と盲目を破る

わたしたちの戦いは
あなたの戦いと同じものだ
同じものだが ちがうものだ
わたしたちの戦いは
手強さを増すだろう

絶望より遠く
希望より遠く
わたしたちの願いがならぶ

もっと強く願っていいのだ
わたしたちは 生きとし生けるものの
地球の家を保ちたいと

絶望より遠く
希望より遠く
わたしたちの仲間の願いがならぶだろう